

全ての経験が今に活きている 地域社会の好循環を目指して尽力

代表取締役

阿部 憲和

×

タレント

つまみ枝豆



様々な経験を経て、縁あって福祉業界に入った阿部社長。『ライフデザインラボ』では、犬と暮らせる障がい者グループホーム『わんらいふ』を2棟運営している。これまでの経験全てが今に活きている——そう語る社長のもとを本日はタレントのつまみ枝豆氏が訪問。歩みなど様々なお話を伺う中で、社長の人柄に触れた。

——まずは、阿部社長のこれまでの歩みを伺います。

山形県朝日町の出身で、学業修了後は、食品やガソリンスタンド、農業、住宅設

備など、幅広く展開している総合商社に入社し、本社勤務になりました。中でも最初は農業に携わる部署に配属となり、肥料やサクランボハウスを作るための資材、酪農用の餌などを管理するのが私の仕事でした。子会社の中には事業所向けの仕出し弁当を扱っているところもあって、そういったところでも経験させてもらいました。

——色々なご経験をされていますね。

様々な経験をさせていただきまして、仕事が楽しかったことを覚えています。そちらの会社には、5年8カ月お世話になりました。次は、山形と秋田に営業拠点を20数カ所持している卸会社で8年ほど経験を積みました。自動車部品や農機具など動くものの部品を扱っていた関係から、ディーラーさんや整備工場さんとのつながりも増えていきました。そ



株式会社
ライフデザインラボ
【本社】山形県山形市旅籠町一丁目15番15号

わんらいふ 山形駅西口
壺番館（女性棟）
山形県山形市城南町三丁目4番26号-1



わんらいふ 山形駅西口
式番館（男性棟）
山形県山形市城南町三丁目5番8号

らでも色々な経験を積ませていただきましたね。そして、社会福祉法人の老人ホームに移ったんです。

——それは大きな方向転換ですね。

私の父が社会福祉法人の役員に就任して、特別養護老人ホームを立ち上げることになりました。人事や総務、財務など、様々な業務を1人で担える人材を探していたと、私に白羽の矢が立ったのだと思います。父に手伝ってほしいと言われて、後にも先にも父から頼まれたのはその時だけだったので、挑戦してみようと思いました。

——そちらはどのような施設でしたか。

老人ホームは、県内で初めての視覚障がい者の方が入ることができる施設でした。それがきっかけで、18歳から65歳までが入れる障がい者施設が、山形には圧倒的に足りていないことを知りました。そんな中、障がい者雇用に取り組んでいる企業から障がい者施設を作ってほしいとオーダーをいただきまして。それが現在の事業につながっていきます。

——では、現在手掛けている事業を伺えますか。

現在、犬と共に暮らすことができる、障がい者グループホームを運営しております。そしてその犬は保護犬で、一棟につき一頭の犬の命を救うことができます。動物とふれあうことで、人は癒やされ気持ちが元気になるし、散歩などを通じて外出する機会が増えますから、人とのコミュニケーションのきっかけにもつながります。ここで注目してほしいのは、犬を「飼う」のではなく、「共に生きる」ということです。障がいや病気があっても動物と共生できるような、そ

んな地域社会を目指しています。

——入居者さんは、どのような生活を送っていらっしゃるのでしょうか。

朝起床し出勤の準備、朝食を済ませ、仕事や就労支援施設にそれぞれ外出します。そして帰宅後、夕方に犬の散歩をして、夕食、入浴、消灯という流れです。市役所や病院に一人で行くのが不安な方にはスタッフが同行しますし、就職フォローもいたします。また、月に一度会議を行っており、皆が気持ち良く過ごせる環境であるように、皆で話し合ったりしていますね。

——犬がいることで規則正しい生活になっていますね。犬と共生することのメリットは多そうです。私も犬が好きなのですが、このような施設は多くあるのでしょうか。

いえ、山形ではこのような形態の施設はまだ珍しいと思います。ここは以前福祉施設だったのですが、移転されたことを不動産会社さんから伺い、こちらに構

えることを決めました。地域の皆さんから、こういった施設が必要との声の多さを感じていますし、中心市街地、駅近等の場所で、ご縁があり出店できたら、今後の施設展開を考えています。そうしてある程度大きくした上で、他の福祉サービスも提供していこうと思っています。

——しっかりと先を見据えて動いていらっしゃる。最後にこれからの目標をお聞かせ願えますか。

現在は、グループホームというかたちですが、今後はこれまで経験してきたことを事業化し、それをパズルのように組み合わせ、関連性がある社会循環のできるプラットフォームに発展させていこうと考えています。それが実現できれば、景気変動にも左右されませんし、利用者・入居者さんたちは安心して生活することができます。それに伴い、心も安定する。そういう広がりを生み出せれば本望ですね。

(2020年8月取材)

異業種の経験があったから——

▼総合商社時代に農業に携わる部署で経験したことから、農家の方々とつながりができた阿部社長。皆さんからのおすそ分けや、実家の畑で生産している米や野菜を、グループホームに提供し、地産地消を目指している。

▼社長が食事にこだわっているのは、老人ホーム時代の経験からだ。高齢者の方々は食事を本当に楽しみにしているそうだが、ミキサーで砕かれた食事は、何を食べているかわからない。そこで、社長たちは4年の歳月をかけて酵素を使ったやわらかい食事提供を考え、東北で初めて内製化したという。そして農業と食品加工、製品提供となれば、6次産業化でき、グループホームの入居者や、新型コロナウイルスなどで職を失った人々への受け皿となることができる。異業種の経験があったからこそ、事業の広がりを目指していけるのだろう。

with guest interviewer



「様々な縁に恵まれて、現在の事業を手掛けるに至ったという阿部社長。対談では全ての出会いに感謝するシーンがありました。そういった人々への感謝の思いが、新たな縁につながっているのだと感じましたね。これからも陰ながらではありますが、応援させていただきます」
つまみ枝豆・談